

別紙2

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 正岡 美麻

トランスジェンダーとは、生まれた性別とは異なる自己認識を持ち、体と異なる性別を生きようとする人々を指す総称であり、トランスセクシュアルとは、異性の一員として生き、受容されたいと思い、自分の身体を自分の好む性に可能な限り一致させたい人々を指す。これらの人々はしばしば、ホルモン治療を用いて、移行したい性別が第二次性徴で獲得する性の特徴を伸ばし、元の性の特徴を減らすことによって、性別違和感の解消を目指している。このうち、女性として生まれたが男性として生きることを望む人は、**Female-to-Male (FTM)**と呼ばれ、我国においては、世界各国の趨勢とは異なり、**FTM**が**MTF**よりも多数を占めることが知られている。また従来の研究では、ホルモン治療を受けたトランスセクシュアルの身体的変化と心理的満足度を併せて追跡調査した研究はこれまでほとんどなされてこなかった。そこで本研究では、男性ホルモン投与による治療の身体面での効果が日常生活で観察されやすい**FTM**を対象に、音声等の身体的変化（客観指標）と、その変化に対する心理的評価（主管指標）を継時的に測定し、その関連を分析した。

研究 1-1 では、18 歳の **FTM** 1 名について、ホルモン投与開始後 2 か月から 5 か月の間の話声位基本周波数の変化を縦断的に記録した。先行研究では、母音発声時の話声位を評価をすることが多かったが、本研究では実生活に則した音声を評価するため文章を朗読する音声を用いた。結果、話声位基本周波数は一貫して低下したが、とくに投与後 2 か月と 3 か月の間の低下が著しかった。

研究 1-2 では、**FTM** の話声位基本周波数の特性、聴取実験によるその声の性別判断、**FTM** 自身の音声に対する満足度に関して調査を行った。実験協力者は、クリニックに通院するホルモン未投与の **FTM** 23 人、ホルモン投与中の **FTM** 32 人（研究 1-1 より最低投与期間を 4 か月と設定）、統制群男性 14 人、統制群女性 10 人であった。分析の結果、投与群 **FTM** の話声位基本周波数は統制群男性のそれよりも低く、聴取実験でも男性声とみなされていた。しかし、投与群 **FTM** の音声に対する満足度は未投与群 **FTM** よりも低かった。ホルモン投与群 **FTM** は音声が男性として他者から認識されていても、声の不安定さを不満要素としてあげる人が多くいた。他方、ホルモン未投与群 **FTM** は低い声が出せるかどうか、他者から男性と認識され得るかどうかを適切に判断し、それを自身の音声の満足度と結びつけていた。

トランスジェンダーでは自殺企図や自殺念慮が高いことが報告されており、彼らの精神的健康が大きな課題となっている。研究 2-1 では、クリニック通院中のホルモン投与中 **FTM**（38 名）と未投与 **FTM**（37 人）を対象に、**QOL (SF-36)**、気分 (**POMS 短縮版**)、怒り (**STAXI**)、自尊感情 (**Rosenberg 自尊感情尺度**)、攻撃性 (**Buss-Perry 攻撃性質問紙**)、ジェン

ダー・アイデンティティ(佐々木・尾崎,2007)、身体満足度(29 部位)に関する質問紙調査を実施し、ホルモン投与が心理面にどのような効果を与えているかを検討した。なお、先行研究では月経周期やホルモン値の変動が考慮されていなかったため、本研究では男性ホルモンの高濃度期と低濃度期を統制した。結果、ほとんどの投与群 **FTM** では、ホルモン投与によるなんらかの身体変化を自覚していた。**QOL**、気分(活気・自尊感情)、ジェンダーアイデンティティ、身体満足度については、投与群の方が未投与群より高く、攻撃性と負の気分については、未投与群の方が高かった。また、これらの傾向は、ホルモン高濃度期においてより顕著だった。

研究 2-2 では、11 人の **FTM** についてホルモン投与による身体変化と心理変化を 1 年半にわたって継続的に調査する縦断研究を行った。具体的には、男性ホルモン投与治療開始 1 か月前からホルモン投与開始直後の 2 か月およびその後 3 か月ごとに身体測定(体重・体脂肪率・筋肉量・大腿筋・握力・柔軟性・音声)を行い、心理指標(研究 2-1 と同じ)について質問紙への回答を求めた。身体変化に関しては、音声とクリトリスの変化の自覚が早く、筋肉の変化の自覚が続き、体毛やヒゲの変化の自覚が遅かった。筋肉の増加といった身体の変化とその変化の自覚はほぼ連動するが、音声については変化の自覚が有意な身体の変化に先立って報告されていた。一方、身体満足度が上昇するには、実際に変化が開始したと自覚してから 2-12 か月を要していた。心理指標では、他者の認識する性別と自己の認識する性別の一致が 9 か月で、自分の性別が社会との繋がりを持っている感覚が 12 か月でそれぞれ統計的に有意に高くなった。**QOL** の心の健康は投与開始 1 年で一時的な悪化がみられた。

まとめると、本論文では男性ホルモン投与による身体に対する薬理効果と本人の治療効果の実感やそれに対する満足度、心理変化をそれぞれ明らかにし、またこれらの客観的指標と主観的指標の関連性を調べ、**FTM** がどのように治療効果を実感するのかを検討した。身体の実際の変化と **FTM** 自身がそれを心理的にどう捉えるかを追った研究はこれまでになく、とくに研究 2-2 の長期縦断研究が高く評価された。ただし、審査会では統計的手法に改善の余地があることも指摘された。論文の完成度を高めるために有益な意見が出され一部加筆がなされたが、本審査委員会は本論文が長期調査に基づく労作であることを評価し、全員一致で博士(学術)の学位を授与するに相応しいものと認定した。